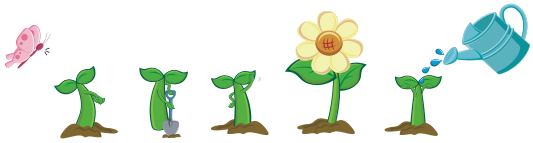
平成25年度 多文化共生セミナー



外国につながる子どもの発達段階に応じた支援

報告

日時：平成 25 年 8 月 1 日(木)　14 時～16 時
場所：つづきＭＹプラザ多目的室１・2

主催：つづきＭＹプラザ
（都筑多文化・青少年交流プラザ）
後援：横浜市教育委員会

＊この実施記録は、シンポジウム当日の録音を基に抜粋し作成いたしました。
また配布資料も、誌面の都合上、割愛しております。

■はじめに

（つづき MY プラザ館長　林田育美）

つづき MY プラザ館長の林田です。本日は多数のご参加をいただきありがとうございました。

日頃外国につながる子どもたちに関わる中で、私たちは子どもの発達段階に応じた支援の難しさに直面しています。二つの文化の中で育っていく彼らを、その時々に応じてどう支援するのか。言葉のこと、時には心のこと、つまずいた時など、その支援のあり方について私たちも学ぶ必要があります。今日はお二人の先生に問題提起をしていただき、様々な立場で外国につながる子どもたちに関わっておられる皆さまとの意見交換の中から、何らかのヒントが得られればと考えています。短い時間ではありますが、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

第１部　講演
『外国につながる子どもの発達段階に応じた支援
～子どもの発達には何が大切か～ 』

講師：飯高京子さん　（東京学芸大学名誉教授　上智大学国際言語情報研究所名誉所員　言語病理学博士）

■進行

それでは第一部の講演に移ります。最初に「外国につながる子どもの発達段階に応じた支援～子どもの発達には何が大切か～」と題しまして、飯高京子先生にお願いいたします。飯高先生は東京学芸大学名誉教授、上智大学国際言語情報研究所名誉所員、言語病理学博士でいらっしゃいます。中国大連生まれで、敗戦後日本へ引き揚げ、高校卒業後渡米留学。働きながら言語病理学博士号を取得されました。それではよろしくお願いいたします。

■飯高京子さん

皆さん、こんにちは。お暑いのに、遠くからいらした方、それからご家族の方、指導員の方、いろいろな方が今日みえているそうで、短い時間にできる限り何かお役に立つような事を提供させていただきたいなあと思って、よくばって準備いたしましたので、足りないところは、今日お渡ししましたレジュメと資料を後でご覧いただければ有難いです。それから簡素化のために、パワーポイントを使いながらご説明させていただきます。少し資料も持ってきましたので、お見せしながら、そこに展示もしておきますので、どうぞ後でまたご覧ください。(資料は、抜粋し掲載しました。)

「外国につながる子どもの発達と支援の課題」なんて、「外国につながる」なんて言うと、何か特別なカッコつきになりますけども、そうではなくて、子ども、大人みんな人間であるという点でいうと変わりないんですよね。レジュメの方にも書いてありますけども、

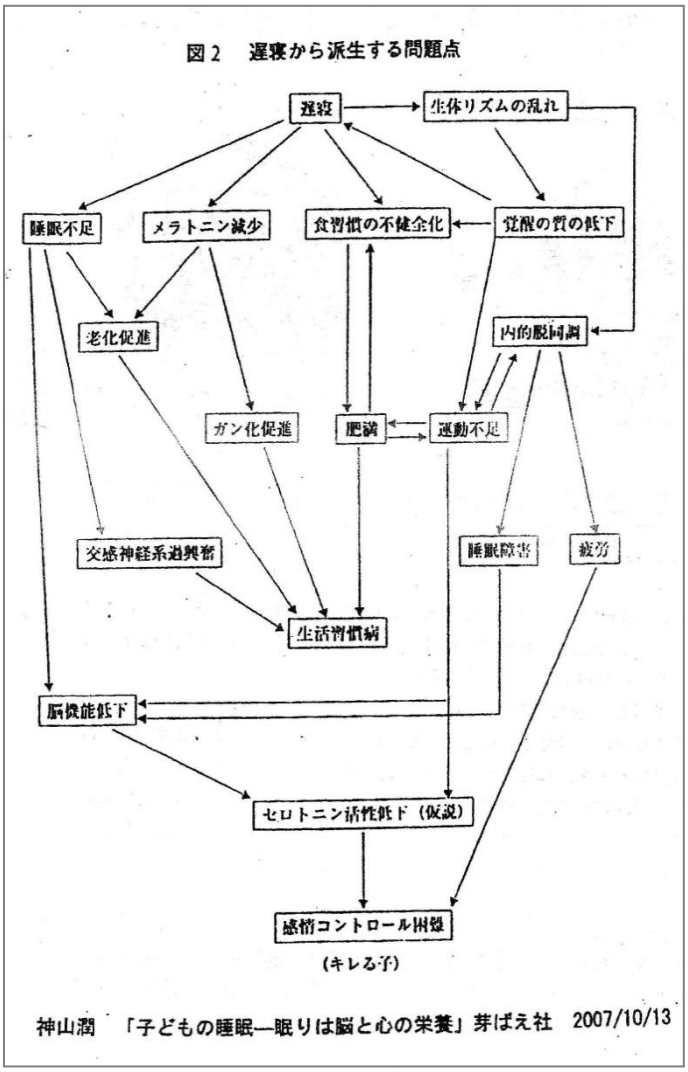
飯高京子さん

人間というのは人の間と表すように、私たちは社会的な存在ですよね。ただ一人で生まれて一人で育つなんて有りえないんで、赤ちゃんは育ててくれる人と、あるいは保育者との本当に絶対的な信頼関係を通して生きる喜び、生きる楽しみを学ぶわけですよね。

幸せなことに、赤ん坊と言うのは可愛がらずにはいられない、そういう天性の賜物を与えられえているんですよね。可愛いでしょ？この赤ちゃんは。たまたまドイツの赤ちゃんですけども、どの赤ちゃんも生まれて数時間後、ちょっとお猿さんみたいですけども、抱いてあげたり声をかけると、クウ～とか声を出して喜んで反応するようになるんですけど、たまたまそういうギフトが神様から与えられていて、人間の赤ちゃんと言うのは一人で育たない。育てられない。だから大人が思わず可愛がって慈しみ育てたいという気持ちになるように、そういう風にちゃんと備えられているわけですよね。

このレジュメにもあるのですけど、レジュメはだいぶ集約しましたが、やっぱりどの大人も子どもの時は潜在的な発達の中で育っていくということで、今すごく英才教育とか知育教育とか、そこを皆強調しますけど、やっぱり体の発達と情緒社会性の発達と、それから認知面の発達というのがどれも同じように上手くバランスをとって育っていかなければいけないわけですよね。生活のリズムというのがすごく大事です。今、テレビ文化が発達してゲームとかいろいろなことで塾通いとかで夜遅くなって、朝ボア～として目が覚めたりしますよね。でもちゃんとした一定時間に床について、朝適当な時間に起きて、まず一杯水なり牛乳なりを飲んで、それからお食事もしたりして体の中の腸が少し活動し始めると、登園とか登校前にもよおして出すもの出して学校に行けるから、園に行けるから、そうすると学習の構え方ができるんですけど、それができないで学校や園に来てようやく目が覚めるお子さんが非常に多いですよね。

そういう生活のリズムだと、いろいろな意味での学習がなかなか上手くいかないんです。生活のリズムとか、眠るっていうこと。これが非常に大事だという。皆さんへお渡しした資料の２枚目の裏をご覧くださると、ここに図の２のところ(資料 1)だと、遅寝から派生する問題点とか、それから遅寝と肥満の関係とか、感情がすぐ切れちゃうなんていうのは、こちらですね。



（資料１）

ここまた後でご覧ください。だから生活のリズムが整ってないということは、子どもにとってすごく負担がかかっているんです。それをぜひぜひ覚えておいていただきたい。きちんとした栄養のバランス。塾に行くために、コンビニで菓子パンくらい買って食べたりとか夜遅くなってラーメン食べたりとか、そういう栄養のバランスが崩れるっていうのも良くないし、咀しゃく機能と書いたのは、私たちの発音の発達なんていうのは、良く噛み良く咀しゃくするっていう生活習慣が、発音の成長の土台になっているっていうね。これ

は乳児期なんですけど、きちんとした食事習慣ができている子どもさんは、特に注意しなくても発音が上手くいくとか、そういうこともあるわけです。その辺の資料は、レジュメのところにもありますように、３枚目のところ(資料２)に摂食行動の発達とか、それから発音が完成していく時期とか書いてありますけど、たぶんここで皆さんが関わっていらっしゃるお子さんというのは、発音そのものよりは心の発達の方が問題になっているのではないかと思います。この情緒社会性の発達っていうここですね。ここが非常に問題になります。

表７　摂食行動の発達

月　齢	学　習	生理的成熟	摂食行動	非栄養性食行動
0	哺乳体験	哺乳反射	→ 吸啜(吸う)	不安静止
～	↓	↓	↓	母子関係スタート 母子症
5か月	離乳食体験	咀しゃく	咀しゃく (食べる)	おしゃぶり
～	練 ↓	↓	↓	
12か月	練　習	両手・目・口の 協応運動の発達	ひとり食べ	指吸い、タオル吸い、 爪かみ
～	↓	↓	手食 コップ 飲み スプーン はし	
2・3歳	しつけ	社会性の発達	社会食べ	楽しみ、社交、 ガムかみ
～				

二木武他編著「小児の発達栄養行動」　医歳薬出版　1986，P31.

（資料２）

レジュメの中には、「三つ子の魂百まで」というふうに書きましたけど、本当に最初の段階の、保護者と子どものしっかりした親子関係、人間関係の確立というのは、何語であれ何人であれ、非常に大事であるって事を、それをぜひぜひ念頭に入れておいていただきたいと思います。

育てる人の精神の安定、情緒の安定というのは、そのまま子どもに反映されるんですね。これが資料の最初のページの下の所の図の４(資料３)っていうところにありますよね。ブリッジェスっていう人の「情緒の分化図式」ってあるんですけど、赤ちゃんが育って、抱かれながらだんだん大きくなっていく。最初の段階で親が不安定だと、それがそのまま子どもに反映されます。大変な犯罪を犯してしまう青年達がいるのは、きっとその初期の段階にしっかりと親あるいは養育者に受け止めてもらえなかった、そんなつまずきがあった人ではないかと思うわけです。

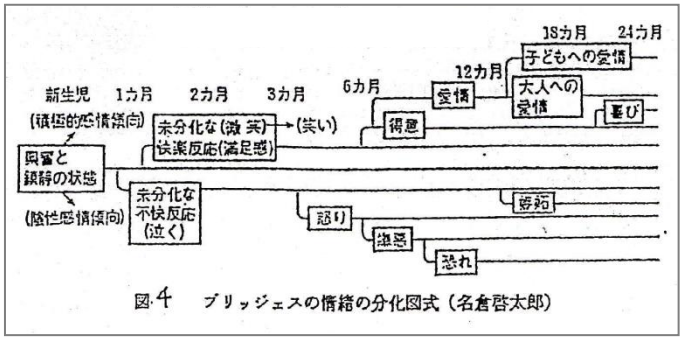


図4　ブリッジェスの情緒の分化図式（名倉啓太郎）

（資料３）

ここでちょっと生理学的なそういう情緒の仕組みについてご紹介しますと、これが大脳(資料４)ですよね。梅干しを干すとシワシワになりますけど、これは頭蓋をとった中身の方なんですが、左側が出ていますが、その中に、この赤いところですね、ここのところに、「脳幹網様体」というのがあるんですね。これは皆さんの資料にも「大脳辺縁系」というふうに書いてありますけれども、この辺りにいろいろな情報が、触ったり嗅いだり見たり。いろいろな情報っていうのは、全部刺激になって、それぞれ伝えられて赤いここの所に来るわけなんですけれども、入って来る時に、ここに関所が有るんですね。その関所っていうのが、情報がいろいろ入って来る時に、この関所が「大脳辺縁系」っていう箇所でして、そこで入れるかどうかのチェックがあるわけですよ。その時に、子どもが非常に不安定で先生とか親との関わりを受け入れることができない、非常に追い詰められたような状況の時は、いろいろな情報がここから入っていけずに止まってしまうわけです。ですから保育園とか学校とかでね、本当にこの坊やが「ああ、ぼくの大事な先生！」と思って、しっかり先生を信頼できる関係がないと、全ての情報っていうのは、その関所のところで止まっちゃうわけです。どんなりっぱな教材を用意してレッスンプランを立てていても、子どもがね、その人を受け入れることができなかったら、何の学習も成立しないっていうことなんですね。だから「三つ子の魂百まで」って申し上げるのは、そのことで最初の段階っていうのは非常に大事であるっていう、そこをぜひ覚えておいていただきたい。

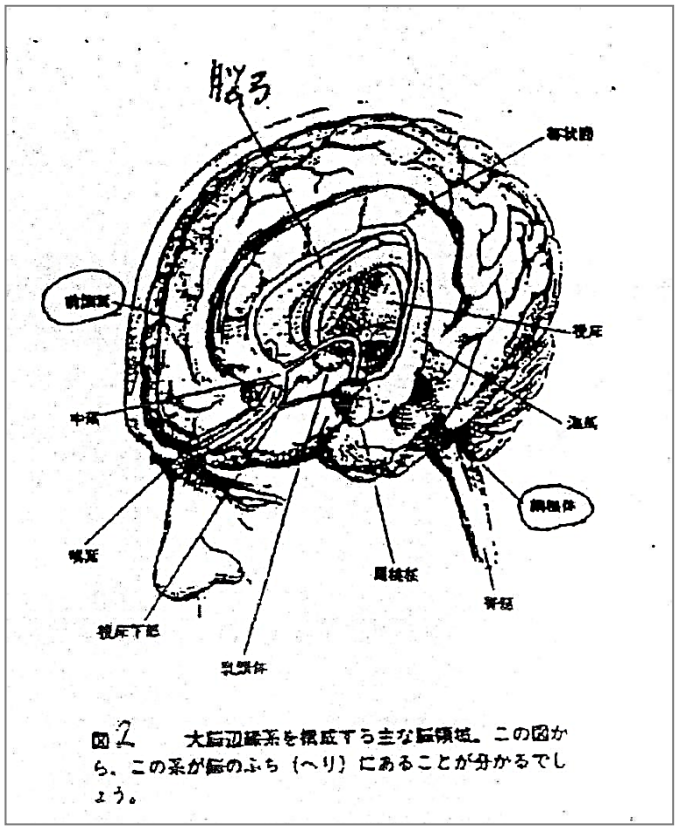


図2　大脳辺縁系を構成する主な脳領域。この図から、この系が脳のふち（へり）にあることが分かるでしょう。

（資料４）

これに行く前に、配布資料のページの一番目の真中あたりに「マズローの欲求の階層」（資料５）というのがありますね。これはどの人にとっても、「人から認められる」「人から信頼される」ということが、非常に大事であるということを示したものなんですが、生理的な欲求というのがまず満たされて、それから子どもがどこか家庭、あるいはグループにしっかり受け止められることが必要なんですね。

愛とか信頼とかこの辺りが本当に大事で、そのちょっと上の所に「自尊心」とか「他者による尊厳」ってありますね。これも大事ですよね。

どんな障がいを持っていても、どんな遅れがあっても、どんな国籍でも、人権っていうのはあるんですよね。そういうことを、この「アブラハム・マズローの欲求の階層」でいう、この最初の段階でそれを満たすことが必要で、人から認められること、自分が自分であるっていうことに誇りを持てる、そういう育ち方をすることはどんな言語を話そうと、どんな環境にいようと、それは絶対に大事なんです。子どもであれ、大人であれそうです。

私の姑は９２で他界しましたけども、どんなに歳をとってきて何ができなくても、自分が何か人の役に立つ、っていうのをすごく母は希望したんですよね。だからおばあちゃんのために、インゲンを一山２５０円かな、買って来て筋をむいてもらうとかね、じゃがいもの皮をちょっとむいてもらってカレーにするとか、「おばあちゃんがしてくれたから美味しいね。」って。その人が、周りの人に対して何かできるっていう喜び、認められるっていうその誇り、それをどんな子どもにでも、どんな大人にでも、必ず備えてあげることが大事なんです。これが生きていくための人間の基本的な欲求。それを満たしてあげることがまず大事なんですよね。

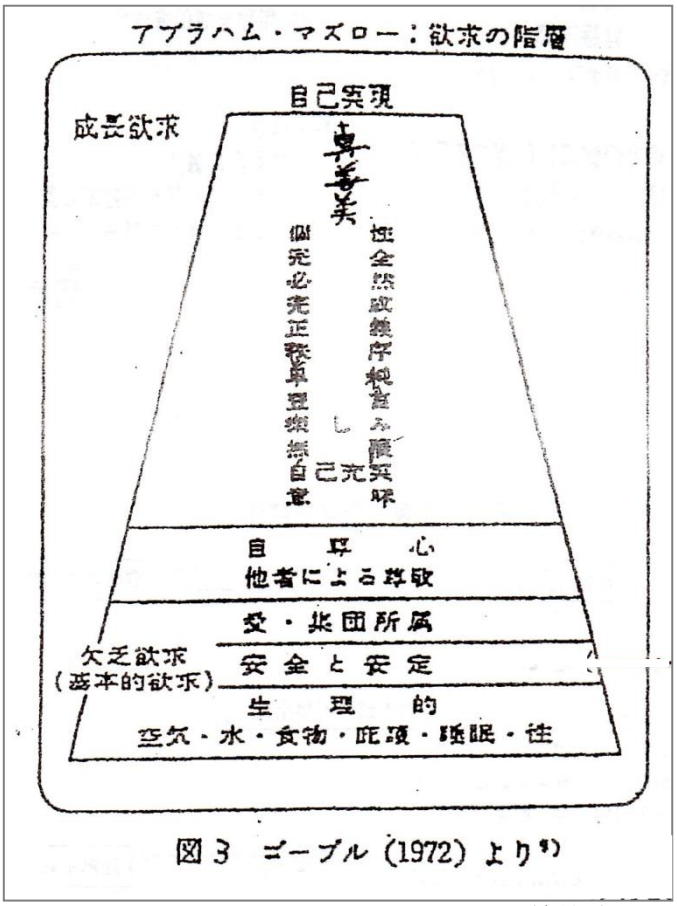


図３　ゴーブル（1972）より[9]

（資料５）

健全な心身の発達っていうのを申し上げましたよね。人間には絶対に必要であるっていうこと。それから情緒的な発達っていうのは、初期の親の安定が非常に大事である。ですから、よく保育園の時に保育士さんが「どんなに言っても子どもに、ちり紙ハンカチ持たせない。」とかね、学校の先生が「あんなにこう言

ったのに、ちゃんと子どもに持たせる物を持たせてない。」とか。まあいろいろあるじゃないですか。実際そういう方もいらっしゃるわけですけれども、でもその方なりに頑張っているっていう、そこを認めてあげて「マーちゃんを今日もちゃんと連れて来られて良かったね。マーちゃん元気だね！」っていう風に認めてあげる。励ましてあげる。夕方「マーちゃん帰って来たよ！」って迎えるわけですけれども、「お宅のマーちゃんは、また隣のターちゃんをひっかいて、つばを吐いたんだ」とか。うちの子なんか、しょっちゅうそれをやられたり、やったりしていたんです。うちのはジュンって言うんですけど、「ジュンちゃんは、また手づかみで食べました。」ってこう保育士に言われるとね、悲しいんですよね。まあ家でも練習するからですけれども。そういう風に言われると、つい子どもに当りたくなるでしょ。だからそういうふうに言う言い方じゃなくて、もう一人の保育士さんは「ジュンちゃんは最初の１、２回はお箸でトライしました。そのあと、美味しそうに手で食べました。」ほら、同じ現象でも言い方一つでこんなに変わるんですよ。何か工夫してね、プラスの芽を伸ばしてあげるような、プラスの芽を引き出してあげるような、そういう関わり方をぜひ工夫していたしましょう。そういうふうにすることで、親御さん、指導者、特に若い指導者なんかね、見ちゃおられないっていう、ベテランの指導者から見ると、若い人見ておられないような失敗をする事が多いんですよ。でも良いんですよ。みんなそこを通ってきたんだから。だから「頑張ってるね、ここはもう少しこういう言い方にすると良いかもよ。」とか、後でそっと、背中をたたいてサポートしてあげる。そういう事をしてあげると良いわけですよね。

情緒社会性の発達（資料６）のところ、もう少し触れますけども、認知的社会的な発達っていうのと、それから言葉の発達がつながっているっていうことがあって、外国の特に外国語の背景がある子どもたちが、どんなに日本語習得のために苦労しているかっていうのがありますから、これも後でご覧ください。

（資料７，８）

図10-6　各年齢における主要な社会的行動（津守真，磯部景子）

年　齢	社　会　的　行　動
1歳～1歳半	鏡の中の自分におじぎをしたり，笑いかけたり，鏡を相手に遊ぶ。道具を見ただけで模倣的に使用する。（クシ，ブラシ，鉛筆など） よく知っている場所にくると教える。（自分の家の前に，または菓子の戸棚の前にくると指さしたり，「アーアー」と言って教える）子供の中にまじっていると，独りできげんよく遊ぶ。玩具を取り合う。絵本を見て，知っている物の名前を言ったり，指したりする。 簡単な言いつけを理解して行う。「新聞を持っていらっしゃい」など。 「いけない」と言うと，ふざけて，かえってやる。父母のしぐさのまねをする。（新聞を広げて食事，すわり方のまねなど）困難なことに出会うと，助けを求める。（物をひっぱって歩いていて，障害物にぶつかると，人を呼んで直させる）本を読んでとせがむ。自分の名前を呼ばれると，「ハイ」と返事をする。
1歳半～2歳	他の子供が母のヒザに上がると怒って押しのけたりする。子供の後をくっついて歩く。友だちと手をつなげるようになる。簡単な質問に答える。（アッチ，カイシャなど）欲しい物があると「チョウダイ」と言って，もらいにくる。 子供同士で追いかけっこをする。遊び友だちの名前が言えるようになる。いちいち「ナアニ」と聞く。言いたいことがたくさんあって，「アノネ」と話しかけてくるが，あとが続かない。
2歳～2歳半	一度期待をもたせてしまうと，だましがきかない。（外へいくと言って，連れていかないと泣く） 一年下の子供の世話をやきたがる。（だっこしようとしたり，食べさせようとする）自分の名前をいれて話をする。
2歳半～3歳	電話ごっこで，ふたりで交互に会話ができる。ままごとで，自分のお母さんやお父さんになりたがる。 「ボク」「ワタシ」などと言う。他の子に「……しようか」と，誘いかける。
3歳～3歳半	隠れんぼをして，みつからないように，独りで物かげに隠れる。 友だちと順番にものを使う。（ぶらんこなど）自分が使いたいものを，友だちが使っているとき「かして」という。 見聞きしたことを，母親や先生に話をする。
3歳半～4歳	隠れんぼをして探す役と隠れる役とを理解する。 自分が負けるとくやしがる。 友だちを自分で家に誘ってくる。 経験したことを，他の子に話をする。
4歳～4歳半	どちらがよくできるか，友だちと競争する。（まりつき，ひこうきとばし，ぶらんこなど）赤と白に分かれた競技で，どちらが勝ったかわかる。 かわいそうな話を聞くと涙ぐむ。 他の子の遊びに加わるとき，「いれて」と言う。
4歳半～5歳	じゃんけんで勝ち負けがわかる。 砂場で，ふたり以上で協力して一つの山を作る。禁止されていることを他の子供がやったとき，その子供に注意する。 自分の家の住所番地を正しく言う。
5歳～5歳半	自分で店にいって品物を買い，つりをもらうことができる。
5歳半～6歳	信号を見て正しくわたる。小さい子や弱い子のめんどうをみる。 尋ねられると，幼稚園や学校にいく道順を説明できる。
6歳～6歳半	取りっこをしたとき，子供同士だけで，じゃんけんで解決する。 ふざけて母親や先生をおどかす。 幼児語を，ほとんど使わなくなる。
6歳半～7歳	友だちが，やってもらいたいと思っていることを，察してやってあげる。（車が動かないときなど押してあげる） 電車のきっぷを自分で買う。 泣くのを，人に見られないようにする。

（注）　この図は，乳幼児精神発達診断法から抜粋し，高野清純らが作成したものである。

（資料６）

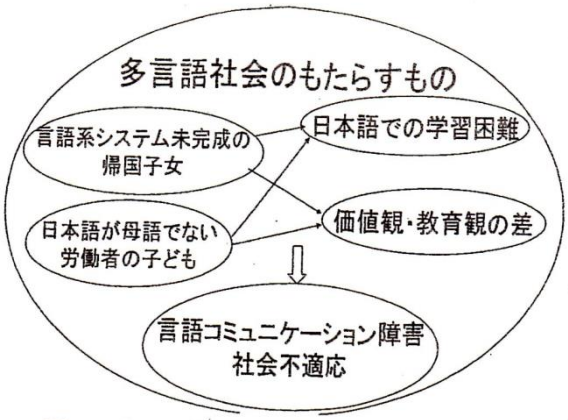


図1.　多言語社会のもたらすもの（飯高、2006）

（資料７）

表1. ペルー人児童の日本公立小学校不適応に推測される要因

	躓きの要因	年齢	推測要因（例）
1	話し始め・話し言葉の習得	幼児期	☐ 周囲の大人との言語接触時間が少ない ☐ 話しことばのインプットが極端に少ない
2	人間関係構築・対話力	幼児期	☑ 双方向の会話場面が少なく、自発的発話の機会が極点に少ない ☑ 周囲の大人との言語接触時間が少ない
3	プレリテラシー・文字習得のレディネス	幼児期	☐ 保護者の教育レベル、その他の要因で、文字環境が劣悪 ☐ 保護者自身読み書きが不自由でも家庭で読み聞かせも言葉遊びもない ☑ 国を超えての移動のため、話し言葉の切り替えが強要される ☐ 周囲の大人との言語接触時間が少ない ☑ 家庭での学習支援がない（現在は改善）
4	学校環境への適応・文字習得	小学校（低）	☐ 学校の価値観や行動規範が異なり、適応に戸惑う ☑ 文字習得のレディネスを欠くため、モノリンガルの子どもたちと同じ速度で文字習得ができない ☐ 家庭での学習支援がない

櫻井千穂　『母語・継承語・バイリンガル教育研究会資料集(2007)』

（資料８）

時間が短いので、もう少し飛ばしますけど、「子どもの健全な育ちとことばの発達を支える条件」(資料９)っていうのに、参考・確認として９つぐらいありますね。今申し上げたようなことがここに書いてありますので、どうぞこれも参考にしてチェックしてみてください。「就学後、外国籍の子どもに見られる傾向」(資料１０)っていうのが非常にたくさんある。学習の構えが、未だなかなか育ってない子どもが多いですね。

こういう子どもたちの場合、家庭に帰っても支援が足りないと、なかなか学校で学んだことが積み重なっていかないですよね。ですから、そういう面でも家庭環境の配慮っていうものも大事になりますし、それからなぜ自分はこういうことをやっているのかっていう意味付けですね、それも非常に大事です。

子どもの健全な育ちとことばの発達を支える条件：(参考・確認として)

1) 受容的な育児態度、子どもの気持ちを尊重　→　自己像、自我の確立
2) 適度のしつけと身辺自立習慣の形成 ― 社会の一員として貢献できるように
3) そしゃく機能を促す食事内容 ― 偏食は日常生活への積極的とりくみを阻害する
4) 安定した生活のリズムー 眠りの足りない子は切れやすく、肥満になりやすい
5) 身体を動かしての遊びや、さまざまな体験の積み重ね ― 安全な環境の確保
6) 読み聞かせ、語り聞かせ、仲間と自分の体験を分かち合う場面の設定
7) いい聞き手、受け手への育ち ― 話題を独占せず、分かち会う楽しさを学ぶ
8) 支え合う家族、仲間集団の育成　― 家族への支えは保育士、指導員も重要
9) ある程度、成功する見通しをもてるお手伝いの課題を準備
やり遂げられたら、皆で認め合う　→　貢献できる誇り、喜び、意欲

（資料９）

就学後、外国籍の子どもに見られる傾向

1) 学習のかまえが未確立　①注視、傾聴行動、②一定時間の着席、困難
③注意転動―すぐ気が散る→模倣できない、学べない
対応：①環境改善→学習場面の簡素化、余分な展示物を排除、
②集中できる範囲を考慮した短時間の課題設定、根気よくくり返し教示
④上記の配慮をして数ヶ月後も改善が得られない場合は、専門家に相談、
→　多動性症候群の場合には、小児神経科の観察、検査も必要となるだろう。

2) 学習の積み重ねができない　①関心の持てない内容、低い動機付けではないか
②学習した後、日常生活の中で応用する機会が不足？
（例：ネパール少数民族識字教育：松浦紀子さんは彼ら自身の母語で読み教材作成を支援）

3) 日本語能力の不足→①指示内容がわからない、②家庭でのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ、支援不足
③両親の母語の理解の不足→　母語、第二言語（日本語）学習不足
→　言語が媒介となる認知・思考能力が十分育っていない
→　日常会話が多少できても、学習の基礎となる語彙が不足

※レジュメの一部を抜粋し、編集しました。　（資料１０）

ここにちょっと数冊持ってきたのは、私の教え子が今、ネパールで１８年目の識字教育をしているんですけども、彼らには話し言葉はあるけれども、文字が無いので、なかなか文字言語を習得することが難しいし、貧しい女性なんかは、学校に行けないから、自分の名前が書けない。自分の存在そのものをあまり認められない。そういうような時にどういうふうにしているかというと、自分の体験をね、話し言葉から、書き言葉に変えるっていうふうに、実際に自分のやっていることや自分の関わっていることを教材にするという、そういうことをして、こういうたくさんの教材を作っているんです。何か関心のあるもので教材を作り、絵カードにしろ、本にしろ、何でもそういうもので、子どもが「そうだ、これ学びたい、やりたい」って思うようなことからスタートするという工夫をしていただければと思います。

ここにいくつか、そういう遊びを通しながらいろいろ学んでいくという、そういう本やらも持ってきました。一つずつの発達のステップにおいて、認められ、そして「そうだよ、そうだよ」っていう風に、しっかり支えられるっていうことは、どんなに大事なことか。

日本語能力が不足していて、十分に学習が成立しないという方たちのためには、海外から帰っていらした大人達で、その海外の言葉とか文化習慣をご存じの方々が、学校で支援をなさっている例を伺ったんですが、そういう方たちを皆さんの地域社会でも、ぜひ活用することを考えていただきたい。日本語だけを教えるんじゃない。その子どもがいた外国の文化生活によく通じている方、そういう方が理解して、その子ども、その家庭の友達になるっていうことが、非常に学習の面でのサポートになりますよね。ですから横浜なんか、あっ今日は、横浜よりもっと遠い所からもいらしてますけども、その地域における人材をね、ぜひぜひ活用していただけるとありがたいです。

ここにありますように、教育っていうのは、“educe”っていう言葉なんですが、それぞれに子どもに与えられた賜物を引き出す、それを伸ばすっていう、私たちはそれを支援するという役割なんですね。あくまでも子どもに与えられたものを私たちは引き出して、励まして、伸ばしてあげる。それが何語であってもいい。できるならば、一番最初の母語でしっかりしたコミュニケーションをまず成立させて、それから日本社会だったら日本語の教育の支援っていうふうに。いきなりね、日本語を学習させるというんじゃない。本当に人と人との心の交流、親子の関係、人との関係を、まず育てる。そしてコミュニケーションは何語でもいいんですよ。こう体に触るだけでもいい。とにかく心の交流が子どもと大人の間にできて、それから学習に進めるように、ぜひぜひ配慮していただきたいと思います。

子どもの全体的な発達の中で、その子どもを見、子どもの発達を支えるためには、地域社会が皆で協力して支えていくことが必要であると思います。終わります。

■進行

飯高先生、ありがとうございました。３０分という短い時間でしたが、たくさんのことを入れてくださいました。私たちも、先生のお話を参考にさせていただきたいと思います。

『支援者から見た、外国につながる子どものつまずきと支援のあり方』

講師：李　原翔さん　（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程 臨床心理学専門）

■進行

準備が整いましたので、これより李原翔先生に「支援者から見た、外国につながる子どものつまずきと支援のあり方」と題しましてお話をいただきます。

李先生は、東京学芸大学大学院連合 学校教育学研究科博士課程に在籍しておられます。中国のご出身で、臨床心理学がご専門です。在日中国系の子どもの異文化適応および教育支援について研究する傍ら、あーすぷらざ外国人教育相談サポーターのほか、通訳として公立高校で中国系の生徒の教育現場に関わっておられます。それでは、李先生よろしくお願いいたします。

■李　原翔さん

こんにちは。これから、外国につながる子どもたちの教育課題と支援についてお話しさせていただきます。実はこのテーマ、「外国につながる子ども」になっていますが、これまでもこういう子どもたちについていろいろな言い方がありまして、「外国籍」とか「マイノリティ」「外国にルーツを持っている子ども」。実はこれは言い方がたくさんある中で、外国から来た子どもたちの多様性のことも物語っていると思います。現在、日本の国籍を持ちながら日本語支援が必要な子ども、または日本語を全く話せない子どもも５千人以上文科省のデータでありますので、こちらの方には全部「外国につながる子ども」という風にしました。

この３つのテーマ「１．外国につながる子どもについて　２．子どものつまずき　３．支援の課題とあり方」についてどこまで話せるか分かりませんが、レジュメ（P16～17 に掲載）に添って話しを進めさせていただきます。

１．外国につながる子どもについて

①　子どもを取り巻く環境

まず、外国につながる子どもたちのこと。なんと言ってもその多様化ですね。この多様化は、まず子どもたちの言語と国籍、民族。それから来日に関して、例えば日本生まれ日本育ち、親が外国人の場合と外国生まれ日本育ち、それから親と一緒に外国から来た子どもと、親の呼び寄せで来る子どもたち。いろいろな子どもたちがいます。また親の在留資格も国によってかなり違っていますが、中国の場合は一番バラつきが大きいですね。例えばフィリピンとか南米だと就労の場合が多いですが、中国だと就職とか就労、または再婚。そういった親の在留資格によって子どもたちのこれからの生活がどうなるか。そういう問題も抱えています。

子どもたちにとって移動の中で一番大きな変化は、やはり家の変化ですね。例えば中国の場合は中国から日本にやってくると、これまで自分が慣れている環境が変わります。おじいさん、おばあさん、友達から離れて日本に来ると、周りには知らない人しかいない。

李　原翔さん

また再婚の場合は、家の中で新しい家族への適応とか新しい兄弟との人間関係など、こういった問題も抱えています。また子どもたちの家の事情によって、たとえば中国の場合、中国と日本の間を行ったり来たりとか、あるいは日本国内で移動したりとか、やっぱり子どもたちの問題と言えば多様化とか不安という問題があります。

人間は異なる文化、環境に来るとどうなるかと言うと、まず一つはカルチャーショックというものを受けます。子どもの間には緊張感や自分はどうすれば良いかなど。あとは文化。やっぱり違和感とか、「ちょっと違うな。」とか、言葉で表現できなくてもそんな風に感じたり、時々「なぜこんな風になった？」とか混乱におそわれたり無力感を感じたり、私たちの目には見えないような体験をたくさん経験します。

②　保護者の子育て不安

子どもだけじゃなくて、やっぱり保護者ですね。子どもの教育といえば、どうしても保護者をいっしょに巻き込んでいかないとうまくいかないのですが、保護者にも言葉の壁、子育て理念の違いがあります。例えば日本語ができても、中国とかフィリピン、ブラジルなど、親の国の文化や子育ての価値観が違います。中国の保護者の場合は、子どもが高校に入って部活に入ったら、「毎日ダンスばっかりやっていいの？」「なんで学校はもっとたくさん宿題出さないの？」「先生との三者面談で、日本の先生は厳しいことを何も言わない。これでいいですか？」とか。日本のお母さんや先生にとって当たり前のことも、やっぱり自分の価値観やこれまで受けた教育の経験によって、皆感じ方も違います。

次は、たとえば日本で生活している親の場合ですが、小さなお子さんを育てる時にどの言語で子育てをすればいいかと、これはすごく大きな悩みです。実は私自身が日本に来てもう２０年になりましたが、子どもが小さい頃からずっと、子育てに関して子どもは中国語なのか日本語なのか何なのか、どうすればいいのか、どれがベストなのか悩んでいます。今でも、たぶん私の２０年前の悩みと同じような悩みを抱えている親がたくさんいるはずです。こういうことに関して、教育相談に来るお母さんたちにどうすればいいのか聞かれると、やっぱり親は一番使いやすい言語で子育てしたほうがいいと話します。先生によっては、今日本語を勉強するんだから、なるべく日本語がいいですよと言いますが、考えてみると、親は慣れない言語で子育てすると親自身にストレスが溜まるし、うまく表現できないし、こういうところで親たちの悩みはまず日常生活からきていると思います。

それから子育てと教育制度に関する知識。今は多言語版でいろいろな資料とか情報とか出ていますが、中国の場合は漢字が同じでも意味合いが全然違います。たとえば、日本の保育園とか幼稚園は中国語で訳すと全部同じですが、日本では全然違いますね。それから内申とか偏差値。漢字が読めても、意味合いは皆分かりませんね。こういった場合はただ訳すのではなく、その中身ももっと詳しく教えてあげないと、いつまで経っても分からないですね。自分自身がどういうところが分からないのか、分からない親たちは言語とかの問題でかなり孤立していて、子どもの教育や学校の教育に関して、自分がどういう風に関わればいいのか、時として親としての自分の役割がわからず自信を失うこともあります。

このような場合、必要な情報を得るために関係機関にアクセスしようと思っても知らない親も結構います。たとえばあるお母さんが、子どもが（これも神奈川県の事例ですが）学校に入ってから何日かしか経たないうちに、「やっぱり学校は辞めたほうがいい。」と言い出しました。辞めて定時制に入れたいと相談に来たんですね。ただ１５歳超えないと定時制に入れない。そしたら「日本語学校に入れたほうがいい。なぜなら日本語が分からないから学校に行っても仕方がない。」実は学校では、これから日本語指導を入れようとしてい

たんですね。でもそこまでは分からないんです。こういったいろいろな問題で、親たちも不安を抱えています。

２．子どものつまずき

①学習面・行動面でのつまずき

それから子どもたちに関してですが、まずなんといっても言葉の問題です。母語の場合、私たちはあらためて教えるということはないですね。子どもたちは成長と共に、自然に言葉を覚えていくんですね、自分の母語に関して。第二言語の場合は、母語を覚えた上で、その第二言語を学習する場合は、その発達段階によって個人の言語に関する学習の動機づけとか、個人の能力によって習得する方法もかなり違います。

学習に関するつまずきや言葉に関しても、当然ながら語彙がないといつまでたっても文脈など理解ができないことが多いです。それから言葉が分かっていても文脈が分からないとどうなるかと言うと、そうですね、ある小学校３年生の子どもが日本に来てしばらくしてから、教育相談のところにお母さんといっしょに来て、「日本は本当に面白い。」と。食事や給食の前に、皆いつも「いただきます！」と言います。その言葉はちゃんと覚えたんですね。でもなぜこの言葉を言うのか良く分かっていないし、中国では食事をする前に何を言うかというと、何も言わない。食事の後も何も言わない。日本人は面白いね、と。この「いただきます」と「ごちそうさまでした」は、本人の中ではこれだけで留まっています。でもこういう文化とか私たちが当たり前と思っていることを、この子どもに、その意味合いとかをきちんと説明しないといけないと思いました。

学習に関してですが、やはり基礎知識がないと移動によって子どもたちが編入する学年、それから本国で勉強していないことを日本で勉強する場合など、下の学年のベースができてないと上に上がるのがすごく大変ですね。たとえば中国ですでに高校に入っていたのに辞めて日本に来て、その後頑張って日本の高校に編入した子どもがいたのですが、編入して２年で辞めたんですね。その子の話によると、ある時「世界史が死んだ」とか、そんな話をしたんですね。日本語ができても、世界史とか日本史だと日本の子どもたちは小学生とか中学生から少しずつ勉強しています。日本語がわかっていても、基礎知識がまったくない子どもたちには、世界史の内容だけではなくてカタカナの多さも難しい原因となっています。覚える内容や単語もすごく多いし、ここで挫折している子どもたちはけっこう多いです。また学習方法も違います。たとえば中国の場合は（私は言えるのは中国だけですね）、何をやろうと成績さえ良ければ良いんですね。日本の学校の場合は、ノートをとるとか意欲なども評価されます。それが分からない子どもが、成績が良いからこれ以上勉強しても成績も良くならないから、ノートとる意味はないなど、勉強の仕方や勉強をしたらどうなるかとか、学習の見通しを立てることができない子どももかなりいます。

また行動面や情緒面でのつまずきに関してですが、やはり低学年の子どもに割と多いですね。集団活動にうまく参加できない、多動な子ども、乱暴な子どもなど。こういった子どもたちはなぜこんな行動をとったのか、もっとしっかり調査しないと分かりませんが、もともと発達面に問題がある子ども、移動によって問題が出てくる子ども、または家の中の人間関係によってこういう問題が出ている子どもなど様々です。

②　二次的なつまずき

二次的なつまずきですが、もともと言葉のハンディとか基礎知識がないということもあって、子どもたちが、自分が分からないことを、勉強の仕方が分からない子は特にですが、聞こうとか調べようとしない子が多いです。つまずいた時に、聞けばすぐ分かるのにしないですね。なぜかというとそうすることを知らないんですね。もう一つは、どうせ分からないからやっても仕方がないという発想です。そういう子どもは日本に来てからこういう風になったのではなくて、ある子

どもによると中一から親が日本へ行くと言い出して親が先に日本に来たんですね。その子はどうせいつか日本に行くから中国で勉強しても仕方がないと思い、中１からまじめに勉強していない。日本に来たのは中３で、中国でも３年間ちゃんと勉強していない。当然日本に来てからも同じで、「どうせ分からないから勉強してもしょうがない」。

あともう一つ、これはすごく大事なことではないかなと思います。自分が分からないところや理解していないところがどこなのか、自分が分かっていない。親も同じですね。これは子どもだけではなく支援者も同じです。日本語ができるから、もう分かっているんじゃないかと思い込んでいます。でも実は分かっていない。そういうこともけっこうあります。

これはレジュメにはないのですが、この表の FC というのは外国人の子ども、この JLS は日本語指導が必要な子どもたちで、１９９１年から昨年までの文科省のデータをピックアップして作ったんですが、特別支援学校に行っている子どもたちが年々増えていますよね。それから中学校の人数と高校の人数はこんな風に変わりました。これは進学データです。外国人の子どもたちが、どのぐらいの進学率なのか精密なデータはないのですが、ただ日本語の指導が必要な児童生徒たちの進学率が、この何年間かのデータを比べてもかなり低いのではないかと言えます。特別支援学校のデータに関してですが、もう一つのデータを見ると、ポルトガル語を話している子どもたちで、特別支援学校に入っている人数は、日本語指導が必要な子ども全体の５割以上を占めています。こういう子どもたちは、本当に発達面に問題があるのか、それとも何か特別支援が必要なのか、それは調べてみないと分かりません。

③事例検討

文章題のつまずきの事例に関してお話しします。今、私は高校で学習支援をしています。ちょうど７月あたりは期末テストがあって、高校一年生の子どもたちの数学の指導をしていたんです。３人は小学校３年生のときに日本にやってきて、今高校一年生で皆日本語はすごくうまいんです。私が一生懸命中国語で話そうとしても、皆全部日本語で返してくるんですね。それで「日本語が、数学が、すごく難しい。できない。」「何ができない？」と聞いたら「倍の数・・・」「倍の数？」「いや、分からない。」「どういう問題かいっしょに読みましょう。」といっしょに読んだんです。「２の倍数、かつ３の倍数、２０以内でいくつあるか。」「これは分からない。」「どこが分からない？」「意味が分からない。」「じゃあ２の倍数分かる？」「分かる。」「３の倍数は分かる？」「分かる。」「どこがわからない？」「かつ、かつが分からない。」「かつ」が分からないから、本当に日本語の問題ですね。でも本人の中では数学が分からない。これはもう本当に小３から高校１年生までの、この長い生活の間に、この「かつ」という言葉を一度も辞典で調べようとしていない。それから集合と要素の問題が分からない。この概念自体すごく抽象的ですね。「あなたは○年○組の一人ですね。そうしたらそのクラスが集合であなたは要素。この関係ですよ。」と言ったら、「何だ、僕分かるじゃん！」と。そういうようなつまずきは、子どもたちが最初から自分は分からないと思い込んで、それ以上は勉強をしないところからきています。それから低学年から日本に来ていると日本語ができるので、先生はこの子達は日本語に問題はないから大丈夫と、ずっと言っている場合があります。実はつまずいているところが、そこのところですよね。

発達障がいの子どもに関してですが、日本は特別支援学級とか通級による指導という制度がありますが、国によっては、たとえば私の国ではそんなにないんですね。地域によっては全くない場合もあります。中国では普通の学校に通っている子どもが日本に来て、親はそういう知識もなく、当然普通の学級に行くと思って入れたケースもあります。その中の一人は、日本に来てボランティアの方たちと先生たちの支援によって、２年間で日本語の基礎を書けるようになったし読めるようになりました。

それから問題行動。落ち着きのない子どもがいろいろといます。一人は学校ではいつも遅刻したり、他の子の邪魔をしたり。私はずっと我慢をしていて、ある日、本当に我慢しきれなくって「何でこんなことするの？」とか「勉強したくなければ、他の人の邪魔をしないでおとなしくして欲しい。」と言ったら、本人は「先生、僕はすごく偉い。だって遅刻しても一度も欠席したことがない。こんなことは中国では絶対ありえない。」そこまで本人は自己評価をしています。その後よく話しを聞くと、中国ではすごくいろいろと問題を起こして、先生とけんかして、先生にけがをさせて退学させられた子なんですね。本人は日本の先生はすごく優しいし、勉強ができなくても差別しないから、自分にとってすごく居心地がいい、もっと頑張りたいと。問題行動の背景には、このようないきさつもありました。

もう一人は、小学校２年生の子が学校でよく暴れたり、暴言を吐いたりしていて、日本に来てすごく太ったんですね。お母さんに聞くと、お母さんが日本に来て５年間はこの子を中国に置いて、再婚のため日本に来たんですね。５年間置いてこの子にすごく悪いことをしたなと、申し訳ないなと思って、この子が日本に来てから欲しいものを何でも与える。学校から帰ってきて、まずファストフード。あとはポテトチップスとか、ビデオ見放題。その次は昼寝。夜はたいがい１１時、１２時にお父さんが帰ってきて、またいっしょに食事して、その生活が不規則で、夜遅くまでずっと起きて。このことが分かってから、まずお母さんに生活リズムのこと、食事制限やビデオを見る時間も制限しないといけないと話しました。生活面が改善して、この子は少し落ち着いてきたんですね。私たちが見ているのは、なぜこういうことをするのかということ。問題の背景にはいろいろなストーリーがあるんですね。

３．支援の課題とありかた

①　つまずきへの把握

子どもたちのつまずきに関して、どこでつまずいているのか、それは日本語の問題なのかそれとも知識の問題なのか、学習障害の問題なのかといったことに、周りの大人が気づくことがまず第一歩ですね。把握した上で、どこから補習をしていけばいいか。たとえば日本の場合は、特別支援学校に関しては子どもたちの特別支援プランとか、計画があるんですね。こういった子どもたちも、子どもによってはその計画を立てたほうが支援しやすい部分があります。子どもたちは、たとえばさっき話したケースですが、「なんだ、僕できるじゃん！」と思うことがあります。ただ「また」とか「かつ」という言葉だけが分かっていない。これが分かれば子どもたちの意欲が高まることになるし、もう少し頑張れると思います。

②支援体制づくり

教育支援に関する問題意識についてですが、たとえば今日いらしてる中でボランティアの方、現場の先生、行政の方、保護者の方、皆が共有しないと、こちらだけ支援しても学校に行って問題が同じように発生するし、学校の問題を親も共有しないといつまでたっても支援のバランスは取れないですね。それからたとえば学校の編入に関してどうすれば良いか。子どもたちの現状と彼らの立場に立って考えるべきじゃないかと思います。当然、国によって制度があるし、いろいろと矛盾しているところもあって、これからどうやってどういう風に改善すればいいのか、これからの課題だと思います。

教育支援活動についてですが、私がこれまで見て考えたのは、どのような活動が有効なのかということです。すごく簡単にできると思うのは読書活動です。小学生、中学生、高校生まで子どもの発達段階に応じて、その内容や日本語レベルを考え、このような読書活動をいっしょにやればいいと思います。たとえば高校生の場合、小学生の頃日本に来て高校に入っても、一番の苦手な教科はやはり国語です。英語、数学ができている子でも、高校に入ってから国語を捨てます。大学進学のために仕方なく。国語は本当に難しいですね。

日本語から国語への移動ステップの真中に存在するものがないですね。こちらの講義とか指導力にもよりますが、向上するために日々読書活動をする。ただ本を読むだけではなく、読んで、より表現したり、自分が読んで感じたことを表現したり、こうした活動を通して勉強する習慣を身につけさせるのもすごく大事だと思います。

子ども同士の学び合いというか、外国人の子ども同士や外国人と日本人の子どもたちがいっしょに学ぶことから得るものの大きさを、私の高校でも感じました。中国の子どもで、退学しようかどうしようかの子でしたが、日本人の子に中国語教えて、何回か教えているうちに「先生、僕はすごいと思っている。なぜかというと、中国語の勉強は日本人の子どもにとってこんなに大変なんだと思った。でも自分はちゃんと日本語を覚えた。僕はもっと能力がある。」と言いました。つまり初めて自分が今まで頑張っていたことや、自分はそんなにできないわけじゃないことに気づいたんですね。子ども同士の学びは、私たち大人からの学びとは全然違います。この学びを通して友だち同士の友人関係づくりとか所属感とか、そういうものに気づいたことは、子どもにとってすごく大事なことだと思います。

教育支援に関してですが、外国から来た子どもの問題は、外国の問題だけではないですね。今、国際化とかグローバル化とかそればかり取り上げられていますが、実際日本にいる外国人の子どもたちとか保護者とか、外国人たちのこれからの教育レベルを向上させるのは難しい問題だと思います。これに関して、やはり先生や学校、親だけではなくて、多言語ができる専門性のある人の育成もすごく大事な課題だと思います。

③　つまずきをバネに

最後に、つまずきに関して私が研究している課題は、その適応と言いましたが、ある時アメリカの先生とこの課題について話していたら、先生は適応とかハンディキャップとかつまずきではなくてチャレンジですよ、と言いました。自分たちの人生の歩みは、誰にも選択できない時があります。これは仕方がないことで、それを背負って生きていかないといけない。外国から来て日本語も分からない、親からのサポートも得られない。こういう子どもはかわいそうだと思っている方もいると思いますが、かわいそうではなく、これから人生の中でチャレンジするチャンスと思っていけばいいと思います。子どもたちのつまずきを荷物とか、不満に思ってはいけないのです。外国人の子どもたちだけではなくて、日本人の子どもたちの中にも、当然同じようなハンディキャップを持っている子どもたちがいます。どこでつまずいているのかそれを理解し、共有することもしなければ支援はうまくいかないんですね。

このつまずきも克服することによって子どもたちの人生はきっと変わります。私の最初の教え子はもう就職してお母さんになっています。高校の時には人間関係でつまずいていたり、勉強でつまずいたりしていました。その時いつも「日本に来なければ、日本に来なければ」と。それから大学に入って一度インタビューしに行った時、「日本に来て良かった。だって日本語と中国語の両方の言語と文化もできて、すごく自分の人生が豊かになった。」と。

もう一人小学校３年生の時に日本に来て、本当に英語が苦手な子が大学の国際文化学部に入ったのですが、面接の先生が「英検３級に合格していない子で、英語にチャレンジしようなんて、こんな良くない成績でよくうちの国際文化学部に入ろうと思いましたね。」と。本人は小学生で日本に来て、まだ日本語ができていないところで英語の勉強をスタートして、先生の説明が全く分からなくて、やる気もまったくなかったんですね。高校に入って２年生になって初めて海外に行きたい、もっといろいろなことを知りたいと思って、高２から英語の勉強をスタートしたんですね。最初は本当に英語の成績がひどかったんです。でも大学にそれで入ったんですね。良く入ったと思います。でも入ってからすごく頑張って、実は今月、国費で香港に１年間

留学するチャンスを得たんですよ。この前この子に会って話したら、本人もやはり異文化に適応するのはとても大変と最初思っていたようです。でもプールだと思うと、やはり最初は泳げないですね。でも思い切って飛び込んで、その中で失敗したり挫折したり、いろいろと経験すればいいじゃないかなと言ってくれました。子どもたちにとって異文化適応とかチャレンジはすごく大変だと思いますが、その中で失敗してもいいと思えること。そして何があってもそばで助けてくれる大人がいるとか、安心できる環境や心のよりどころがあれば、子どもたちはもう少し頑張れるんじゃないかと思います。これで私の話は終わります。

■進行

李先生、ありがとうございました。第２部に移りますが、そのまま少しお待ちください。

平成25年度 多文化共生セミナー　　つづきMYプラザ2013年8月1日
外国につながる子どもの発達段階に応じた支援

支援者から見た、外国につながる子どものつまずきと支援のあり方

李 原翔
東京学芸大学大学院連合学校教育研究科
あーすぷらざ外国人教育相談

発表概要

1．外国につながる子どもについて
　① 子どもを取り巻く環境
　② 保護者の子育て不安

2．子どものつまずき
　① 学習面・行動面でのつまずき
　② 二次的なつまずき
　③ 事例検討

3．支援の課題とありかた
　① つまずきへの把握
　② 支援体制づくり
　③ つまずきをバネに

---

1. 外国につながる子どもについて

① 子どもを取り巻く環境

✎多様化と移動
多言語多文化環境
来日経緯の多様化
親の在留資格・家族事情の多様化
国境を越える移動・日本国内を移動

✎環境の変化によるカルチャーショック
心理的緊張感・違和感・無力感・混乱

1. 外国につながる子どもについて

② 保護者の子育て不安

✎言葉の壁・子育て理念の違い
どの言語で子育てすべきか
何を基準とするか、子どもにとって何がベストなのか

✎文化と制度の壁
子育てや教育制度に関する知識の欠如
孤立化・役割やかかわりかたへの戸惑い
必要な情報や関連機関へのアクセスが困難

2．子どものつまずき

① 学習面・行動面でのつまずき

✎言葉の発達と認知発達
母語の場合→生活の中で認知発達と共に自然に習得
第二言語 → 発達段階・動機づけ・個人差

✎ 言葉と学習のつまずき
語彙・文化的文脈・表現
基礎知識・学習経験・学習方法・見通し

✎行動面・情緒面でのつまずき
落ち着きがない・集団活動への参加が困難
情緒不安定、感情のコントロールできない

2．子どものつまずき

② 二次的なつまずき

✎学習法
分からないことを聞こう・調べようとしない

✎自信と意欲
どうせわからないから・頑張っても無駄

✎メタ―認知 Understanding what I understand
理解していないことを気づいていない

２．子どものつまずき

③　事例検討

✎ 文章題のつまずき

✎発達障害児の可能性

✎問題行動の背景

３．支援の課題とありかた

①　つまずきへの把握

✎つまずきへの気づき→把握→見極める

✎段階的にきめ細かく対応

✎子どもの気づきや意欲を高める

３．支援の課題とありかた

②　支援体制づくり

✎関係者による情報と問題意識の共有

✎専門家に相談→要因検討→解決方法

✎子どもの立場と利益を最優先に考慮

３．支援の課題とありかた

②　支援体制づくり

✎教育支援と指導
読書活動→発達段階に応じで展開していく
表現意欲の促進・思考能力の向上・読書習慣

✎子ども同士の学び合い・助け合い
関わり合い→友達作り→理解し合い
活躍の場の提供・所属感と仲間意識の育成

３．支援の課題とありかた

②　支援体制づくり

✎子どもの現状に対する支援者と保護者の共通理解

✎支援者と専門家の多文化意識の向上

✎多言語専門人材の養成

３．支援の課題とありかた

③　つまずきをバネに

✎　つまずき→挑戦→成功体験→自信

✎　つまずきに対する理解と受容

✎つまずきを克服する経験→人生を豊かにする財産

第２部
参加者との意見交換
『子どもたちの未来をともに描こう』

■進行

これより、第２部を始めたいと思います。第２部は、「子どもたちの未来を、ともに描こう」ということで、皆さんで意見交換をしていただければと思います。コーディネーターは、つづき MY プラザ館長の林田が行います。ではよろしくお願いいたします。

【林田】

飯高先生、李先生、本当にありがとうございました。お話いただく時間が短かったのですが、しっかりと準備を整えてくださいまして、いいお話を聞かせていただけました。今日は様々なお立場の方たち、また横浜市に限らず、近郊からもお越しいただいています。皆さんの活動のご紹介、あるいは先ほどの先生方の話を伺って、何かご意見やご質問があればお受けしたいと思います。何かございませんでしょうか。ご遠慮なく手をお挙げください。いかがでしょうか。

【参加者１】

今日はありがとうございました。それぞれ、本当に心に思い当たることがたくさんあって、なるほどと言いながら、うなずいておりました。日本語のわからない子どもたちをみていまして、いろいろな国籍の子どもがいます。私自身はスペイン語で支援しています。飯高先生にお伺いしたいのですが、どういう接し方を保護者にしたらいいのか、何かヒントになるご意見を伺えたらといいと思います。お願いします。

【飯高】

その方のいろいろな背景を、まずよくよく伺って、こちらが聴くというか、学びたいという気持ちを伝えることで向こうの親御さんの警戒心を解いて、そこで何かお互いに分かち合うものがないかというのを見出しながら、お子さんのことを一緒に、お子さんだけでない地域における家族のことも一緒に考えていきましょう、みたいに持って行けるといいのではないでしょうか。その方の文化を「そうですか、いいですね」とか、「ああ、面白いですね」とか、興味を示して分かち合う。その方が持ってらっしゃる持ち味をコミュニティで発揮できるようにすれば、自信がつくし、心許して一生懸命に分かち合ってくださるのではないでしょうかね。

【林田】

いかがでしょうか。よろしいですか。他にご意見、ご質問ありますか。

【参加者２】

どうも、ありがとうございました。私は「ラック・パーサータイ」というグループでタイにつながりを持つ子どもたちの母語教室ですとか、学習支援をしている者です。今日は先生方のお話を、どれもなるほどと、思い当ることがたくさんございまして共感しました。ありがとうございました。一つですね、ご紹介したいことなんですけれども、李先生の最後の方にありました、レジュメの方にあります支援体制のところの読書活動というところですが、実は私もたまたま神奈川県内の小学校に日本語指導で２年ほど通ったことがありまして、その時に取り出し授業で学習教室とか特別な教室を使うことが多かったのですが、ある日その教室がふさがっていたことがあって、図書室を使ってみた

んですね。そしたらそこには日本語の教材だけでなくお勉強の教材もいっぱいあるわけですから、苦手な教科のサポートになりそうな本や図鑑を持ってきたり、そういったことで楽しく日本語の勉強しながら、学習のサポートができたような気がします。ですので、支援で図書室を使うことをご提案できたらと思いました。ありがとうございました。

【 李 】

実は大田区で母語教室のボランティアとして関わっているんですが、最初大田区の蒲田小学校の図書室を借りて、そこで子どもたちと中国語の勉強をしていました。今は場所が変わって別の所に行ったのですが、上が図書室になっていて、子どもたちは最初ここがイヤと言っていましたが、親が無理やり連れてきました。でもいろいろな本があって、それも堅い日本語ではなくて、絵があったり自分もわかるような日本語があったり。今も３階に図書館があるんですが、早めに来て図書館へ行くんですね。終わったらまた図書館へ行きます。これで少しずつ子どもが読んでいる本が厚くなって、今、いろいろな活動の中で作文を書く練習をして、書けるようになったんですね。これ、すごく良いアイディアだと思います。

【林田】

ありがとうございます。

【飯高】

少し付け加えさせていただきたいのですが、李先生がおっしゃったように、私アメリカで、最初に高校卒業してすぐ行った時に、学校で政治史、ポリティカルサイエンスなるものをとらされたら、何がジェファーソンか、何がワシントンかさっぱりわからなくて、先生はしかもジョージア州のすごいサウザンアクセントが強い方で、講義が「オルゥオルゥオルゥ」って言うんですよね。私わからないから先生のところに行って、「先生の発音がちょっとよく聞き取れない。」って言ったら、「あなた、こういう講義について行けないようなら、学校に来る資格はない。」とか叱られて、これは、えらいことになったと思って市立図書館に行って、日本でいうならマンガ日本史。絵のついた小学生向きの本を借りて、一生懸命絵を見ながら誰がどういうことをしたというのを見て、それでようやく、こういうことをアメリカの子どもたちは小さいころから学んで高校卒業して大学に至っているんだと分かったわけです。そこまではこっちはないわけですね。だから名前や date だけ

聞いても、全然わからない。そういう空白の経験があるというのは、李先生がおっしゃったように、彼女たち、彼らに読書体験でもって備えてあげるといいですよね。先生ホントに良いことをしてらっしゃると思います。

【林田】

ありがとうございました。今日は外国籍の方もいらっしゃいますし、国際結婚をされている方もいらしています。何かご感想がありましたらどうぞ。

【参加者３】

ありがとうございました。私は地域で外国につながる子どもだけでなく、発達障がいのある子どもさんとか不登校のお子さんの支援をするNPO法人をつくっています。今、話のありました発達障がいのあるお子さんで、事例というか私の経験で、LDのお子さんだったんですが、先生が言われたようにその子が興味を持っているコミックとか、とにかく好きなもの、本人が欲しいというと親から見ると「こんなコミック」となるんですが、本人が好きなものを見せるようにしたら、読む力が出てきて、今、大学生になったんですね。そういうことが、その後の子どもの伸びる力になり、その子の興味を真ん中にして育てると伸びるんだということを経験したんです。お話を伺って共鳴しました。

【林田】

ありがとうございます。ママたちがここにいらしています。ご感想をお願いします。

【参加者４】

国際結婚しています。私自身は日本人なんですが、まだ子どもは３歳と１歳でこれからどういう風になるのか、いろいろ考えながら子育てした方がうまくいくなと思って今日のお話、ホントにありがとうございました。私は日本人なので、もう日本語で思い切り育てて、環境も日本語なので旦那さんの方の言葉をどういう風に入れていくか考えていました。今日のお話を聞いて、人間としてつまずきながら挑戦しながらどういう風に育てていくのかが、大事なんだなと思いました。ありがとうございました。

【林田】

外国籍のママです。いかがですか。

【参加者５】

今日はありがとうございます。私も国際結婚してます。私自身は中国出身で主人が日本人です。４歳の子どもがいますけど、さっきの李先生の話を伺って、どの言葉で育てるかすごく悩んでいて、二人きりの時は思い切り中国語で話していますが、でも返してきた言葉は全部日本語で、やっぱりそのせいなのか、日本語も未だにうまく話せなくて、勉強も全然、日本語も話せないし平仮名も全然読めないから、今、絵本とかも「ママが読んで」って言って。絵本を読んでる時、普通は絵本を読んでるときは静かに読みますけど、うちの子は私が読んで、そばで舞台みたいに絵本のストーリーを自分で演じているんですね。なりきって。それでいいのかなって思って、いつになったら字に興味をしめすかなって悩みつつ、そのまま中国語で声かけしていいのかなって思っています。ありがとうございました。

【林田】

李先生いかがでしょうか。

【 李 】

私も国際結婚で、子どもは高校生３年生と高校１年生で、小さいころは結構、絵本の読み聞かせをしていたんです。私の日本語が下手で、切るところがどこで切るかわからなくて、自分も一生懸命中国語で訳そうとしても日本語がわからなくて中国語の訳もうまくいかない。娘が４歳辺りで保育園に入れたんですね。保育園でも読み聞かせをやってるし、ある時娘から「ママ下手だから私読む。」と言われ、それから娘が私の代わりに読んだり、交代交代で読んだり。息子の場合、

５歳辺りで発達障がいと言われまして、行くところによってはADHDとか、アスペルガー症候群とか、自閉症と言われました。５歳になっても文字に関して全然関心がなくて、保育園の先生にせめて小学校にあがる前に平仮名と自分の名前を書けるようにと言われ必死に教えていたんですが、反発ばかりで大変でした。でもその後絵本は好きで、でも一般の本ではなくて歴史の本が好きで、特に三国志が大好きで、三国志の中国のビデオから見てそれから日本のマンガ読んで、それから大きい本読んで、あとは漢字がスゴク強くなって、漢字検定２級試験とかを中学生で取ったんですね。やっぱり子どもを長い目で見ればいいかなと。今できなくても個人差があるし、関心があればそのうち伸びると思います。それから言語に関しても、お母さんが自信を持って中国語で育ててください。日本語に関しては、環境は全部日本語なので、子どもたちは学校なり友だちなりから自然に覚えていくので全然大丈夫だと思います。

【林田】

ありがとうございました。飯高先生いかがでしょうか。

【飯高】

はい、バイリンガルエデュケ―ションで有名な、いろいろな研究しておられる中島和子先生。トロント大学の先生がマニュアルにも書いておられるんですが、国際結婚の場合は父親、母親の使う言語を分けて、場所も分けて、母親が例えば日本人の場合は徹底して日本語を話しなさい。中国人だったら徹底して中国語で話して、母親にとって一番親しめる母語で子どもと交流を図りなさい。で、その他の例えばテクニカルラングェイジでもいいですし、何でも、ある場面においてある言語は父親の役割、あるいは母親の役割ときちんと仕分けをしておいて、李先生がおっしゃるように学校に行くようになったら周りがみんな日本語であったらいやがおうでも日本語がだんだん入ってきますし、あんまり焦って子どもに嫌気を起こさせないで、むしろ「文字って面白いね、アッ、こんなことが書いてある。」っていうような。私も中国語の新聞の中で知っている文字を見つけるのが好きで、「だいたいこういうことかなあ。」というぐらいは推測ができるんですが、そういうところからでいいわけですよ。看板見て自分が知っている文字があったり、例えば「真由子」だったら、「真があったー、真由子があったー」となればいいわけだし、だんだんそうやって興味のあるものに対して発見しながら学習していくから、李先生がおっしゃったみたいに国際人としては、あんまりあわてて日本人に同化させなくても両方の文化を持っているのは強みなんですよね。だから誇りを持って、しっかり中国語で可愛がってあげてください。

【林田】

はい、ありがとうございます。それでは、どうぞ。

【参加者６】

すみません。私は高校で教員をしています。今日はお二人のお話を聞かせていただいて、うちの学校でもよくある風景だなと思ったところがありました。お二人に共通していたお話と、皆さんのお話を聞いて思ったのが、親子の間でとるコミュニケーションのために学ぶ言語と、社会の中で先行していくというか生き抜いていくために必要な日本語の獲得というのと、外国につながる子どもたちには、いくつか言語を学ぶというところで盛り込まなければいけない課題がたくさんあるんだなと思いました。お二人のお話の中で、成功体験が必要であるとあったんですが、学校生活の中でこういう成功体験があったらいいですとか、学校の中でこういうつまずきが多いとかあれば教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

【林田】

李先生いかがでしょうか。学校生活の中でということで。

【 李 】

そうですね。例えば中国から来た子どもで、専門学校に入ったんですが、高校に入った時私に言った最初の言葉は、「私一番嫌いなのは勉強。勉強さえなければ何だってやりたい。」でも高校に入ったら勉強しかないんですね。外国人の子どもはほとんど部活に入れない。スポーツ系の部活は中国から来た子どもは経験ないし、入ってもつまずくばかりで、勉強もついていけない。部活に入らないと友だちもできない。

その中で外国人の子どもによるスピーチ大会があって、一生懸命練習して連れて行ったんですね。賞はとれなかったんですが、ただ声がすごくきれいで、他の学校の子たちに「声がきれい、きれい」と言われて、それまでこの子は「私はダメな人間、何をしてもダメな人間」。この学校にいつまで行けるかわからなかったのに、声がきれいと言われて、学校に帰って私が気づいたのは、声が大きくなったということです。声が大きくなったということは自信が出てきたんですね。それから学校の勉強は少しずつ自分ができることが増えて。これは極端な例です。

それから学校のテストはほとんど平均以下ですね。ただ日本の学校のいいところは、毎回テスト範囲を教えてくれるところです。このプリントとか何回ぐらいやればいいか。覚えればできる。そしたらこれだけやる。それを決めて、数学のプリントも５回、６回やればすごくいい点数とれる。本当はそんなにできてないんですね。でもこれだけでも、少しずつ自信が持てるようになってきて。高校進学後は最初から大学は行きたがらない。勉強は嫌いだから。美容師になりたい。少しずつ専門学校を訪問したりスピーチの練習しているうちに、私がいつも面接官になって面接の練習をしたりしているうちに、他人に質問したり受けたり、そのやりとりをしている中で少し話す自信がつき、見事に専門学校に合格しました。

７月はその専門学校のコンテストで、すごく上の級にいたそうです。でも専門学校に入ってもあまり真面目な子ではなくて、遅刻欠席が相変わらずあって。でも専門学校だとテストに落ちたらお金払ってもう一度受けることになっているので、それは本人にとってすごく痛いこと。あと、遅刻したら掃除当番になる。高校ではあり得ないことで、こういうことを通して、本人は絶対に二度と遅刻しない。したくない。恥ずかしい。みっともない。あとテスト落ちたらお金払わないといけないし。それでも私、一年生から、この子いつ辞めるかとずっとハラハラ見てきて。ホントにスピーチ大会の後から、少しずつ自信が持てるようになってきたんですね、わずかなことでも。こういう子どもたちは日本に来るまでは、中国では先生にとってはもう面倒見なくてもいいという存在になっていた子どもです。ここに来て、本人にとってすごく良かった。これもひとつ、極端な例ですね。

あとは中学の発表で、ある子は日本語ができない。それで先生は、小学校の中国の漢詩を「中国語で読んでみてください。」と。でもみんなの前でうまく読めない。読めない漢字もあって、わからなくても本人なりに読んでみたんですね。それをみんな、「すごーい、かっこいい！」と。でも実は読めない漢字は何とかごまかしていて。そのあと学校の朗読大会があって、それでまた先生が中国語の漢詩でいいと。それから日本語の勉強を頑張ってできるようになったんですね。それから読書感想文。夏休みの宿題にあるんですね。書けないです。先生は「中国語で書いてもいいよ。」と。中国語で書いた文章を先生は外にちゃんと貼ってくれて、それで中国語のできる子どもたちに日本語に訳してもらって、それからみんな、すごくつながった。本当はそんなに日本語とか中国語、両方できない子どもも、辞書で一生懸命調べてすごくいい勉強になったと思います。学校の中で子どもたちは、勉強というよりは人間関係でのつまずきが、たぶん、高校生の場合は一番大きいと思います。

【林田】

ありがとうございます。他にいかがでしょう。

【参加者７】

今日はお二人のお話、どうもありがとうございました。私は横浜市内で特別支援学校の教員をやっているんですが、横浜市の方から特別支援教育の最新のものをゲットして来るように言われて、大学で学生しながら特別支援教育の勉強させてもらっています。今のお二人のお話をお聞きしたり大学のいろいろな先生方からお話を聞きまして、発達障がいも含めてですね、特別支援教育、文科省が言っている特別支援教育の中ですけど、アメリカから輸入したらしいんですが、なぜか二つのところが抜けた状態で日本に特別支援教育が入ってきたんですね。

一つは、英才教育の方の特別支援教育が抜けたんですね。もう一つ、僕は、これがぜひとも必要だと思うんですが、移民教育の部分ですか。それも特別支援教育っていう発想がスポンと抜けた状態が日本にはあるんですね。で、いろいろ話を聞いたり勉強したりしていくと、特別な支援が必要な教育というのが、外国につながる子どもたちにぜひとも必要なんじゃないかなと、話しをさせていただいています。外国につながる子どもたちの教育が一番特別支援じゃないかと、僕個人は思っているんですけども。いかがでしょうか。

【林田】

ありがとうございます。飯高先生いかがでしょうか。

【飯高】

ありがとうございます。本当にそう思います。少しここに本を持ってきたんですが、特別支援教育の教材は、そのまま外国につながるお子さんたちにも役立つと思います。さっき、李先生がおっしゃっていたように、「何とかの前に」とか、「後に」など位置を表す言葉。それから数学でも「合わせて」っていうのがわからなかったり、○＋○とかっていう数式をLDの子たちはできるんだけど、「何とかと何とかを合わせてどうなる」とか、「残りはどうだ」っていう、そういうごく単純なようで特別な用語がたくさんあって、発達障がいの子どもも、外国につながる子どもも、そこでつまずいちゃうんですね。

私も海外で最初のうち勉強した時に、試験問題の何かひとつ表現がわからないとあと全部わからないんですよ。だからしょっちゅう白紙なんですね答案が。ちょっとした表現は致命的です。だからさっき申しましたように、特別支援教育に携わる人っていうのは、ただ日本語がわかっているだけじゃなくて、どういうところに彼らのつまずきがあるか、どういうところを支援したほうがいいかなんていうことを、やっぱり、きちっと文科省で押さえてあげて、そういう子たちに支援をしてあげて欲しい。だってね、ホントに自尊心を傷つけられているお子さんはいっぱいいると思うんです。特別支援を受けている発達障がいのお子さんも、ちょっとした助けでどんどん伸びるお子さんがいっぱいおられるので、先生が今、大事なテーマをおっしゃってくださったと思います。ありがとうございます。

【林田】

ありがとうございました。はい、こちらで手が挙がっています。

【参加者８】

すみません。私もただのママなんですけど、うちの主人と私が韓国人で、うちの子は日本で生まれて、今までずっと育っているんですが、私の疑問はここに住むか韓国に帰るか、他の国に行くか、何にも決められていないんですよね。それで今の資料を見て、「安全と安定の欲求がある」と書いてあるんですが。それって、普通、そういう生き方しかできない人の家庭はどうやってその欲求を満たせばいいかっていうのがあるし、日本の国内にも結構出張が多いお父さんがいらっしゃる家庭もそうなんじゃないかと思うんですが、

それが一番今の私の課題なんですけど。どうすればいいんでしょうか。

【林田】

飯高先生の資料だったかと思うのですが。先生、いかがでしょう。

【飯高】

アブラハム・マズローとかなんとかって言うんですよね。子どもにとって、安全安定の環境が必要であるっていう。親が絶対安定していなければいけないっていうことはないわけで、親も人間だから、精一杯に、その時その時の気持ちでお子さんに接してあげるんでよろしいんだと思うんです。私の息子は保育士をしています。よく自分の保育士としての体験を私に話してくれるんですが、親が不安定で仲が悪いと、それをもろに子どもが被っちゃって、子どもが園でまわりの子を引っかいたり、噛みついたりね、なんか荒れてるなと思う時があって、それとなく親御さんに「いかがですか」とお話を伺うと、「今、実はこうこうで」というようなことがあって。子どもっていうのは親が不安定でどうしていいのかわからないと、すぐそれが伝わるので、将来どうなっていくかわからないんだったら、それはそれでいいんですよ。でも今日一日こんな風に、「ご飯、美味しかったね。」とか「お天気がよかったね。」とか、その日その日の喜びを分かち合う。そして、「今、困ってるんだ。」とか自分が完璧でなくて迷っていること不安なことも、もしわかる年齢だったら話すし、もしわからなかったら、「ママ、さっき怒ってゴメンね。」と抱きしめてあげるとか、そんなのでいいんですよ。そのうちに子どもっていうのは、だんだん分かってくるけど、決して親は完璧で安全で安定している親じゃなくていい。だけど、今不安を抱えている、その中で一生懸命子どもに向き合っているというのが通じれば、子どもってホントに素直に育ちますよ。

【林田】

ありがとうございました。

【参加者９】

先ほど横浜市の先生のお話を聞いて、すごくヒントがあったなと思いました。私は実は大阪から来たんですが、大阪の府立高校に学ぶ生徒にも日本語指導の必要性があるのですが、枠があったり、定員割れだったりとか、定時制に全入で入るので結構な数の、日本語指導を必要とした生徒が入ってくるんですね。で、その中に指を折って数えると５本では足りないくらい、今学習につまずきを持っている生徒がいるんですね。で、全然日本語がわからないっていうか、一文しかわからない子どもたちに、まず日本語指導をしないといけないんですが、なかなか入らないんですよね。何遍やってもひらがなが定着しなかったり、教える方もそういう支援教育を受けていないので、普通の日本語教材を使って教えています。今お話を伺って、実際にどういう教材で日本語指導をしているのか具体的に教えていただければ嬉しいと思います。

【林田】

実際に日本語ボランティアの活動をされている方もたくさんおられるかと思います。日本語を教えていらっしゃる方にも教材についてお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。李先生、いかがですか。

【 李 】

私が今行っている神奈川県のあーすぷらざというところに、外国人の子どもや大人向けの日本語教材、多言語版の教材などがたくさんあります。インターネットでダウンロードできる教材もたくさんあります。それから、先ほどお話された発達障がいの子ども用教材なんですが、実はあーすぷらざにも外国人の子どもたちのために、読書というか文章の読解用として、教材もたくさん置いてあります。すごく文字も大きくて文章も短くて文章の下にいくつか質問もあって、LD の子どもたちのための教材ですが、実は外国人の子ども

にも面白くて、毎回、例えば何曜日何日に何があったとか、そのあと短い質問もあって、使い方としては子どもたちと一緒に読んで質問に答えて。あと書いて文章を丸暗記してとか、そういうことを通して、読むことや書くことに関してすごく関心を持てるようになったという話も聞きました。ああいう教材はとてもよくできているし、発達障がいの子どもに応用できる教材は、外国人の子どもたちにも、実はレベルによっては良いものがたくさんあります。

【林田】

ありがとうございました。飯高先生、いかがですか。

【飯高】

ついでに加えていいですか。愛知教育大もとてもすばらしい、いろいろな宝庫というか、いろいろなリストが教材としてあります。ネットで調べられたらそういうものが出ています。申し込めば送ってくれると思いますよ。それから大阪からみえたということで、大阪の確か市立図書館を事務局にしているデイジーっていう。いろいろな活用ができるんですね。読み障がいの子どもたちに主に使われている教科書、デイジーのソフトに打ち込んでここを強調したいと思ったらそこの文字が大きく出たり、いかようにでも使えるプログラムで、確かスウェーデンから入ってきたプログラムではないかと思うんですが。特別支援教育に携わっていると問い合わせると、デイジーというのは、ほんとに花のデイジーなんですが、そういう特別支援教育なり、日本語教育もそうだと思うのですが、そういうのに関わっているということを言って申し込まれたら、いろいろ助けになる教材なんかを紹介してくださると思います。

【参加者１０】

すみません。今日はありがとうございました。いろいろと参考になりました。私はこちらで、外国につながる子どもたちを２０人ばかりですけどみています。それで、先ほど特別支援教育と重なる部分があるという風におっしゃられたのですが、失礼があるかもしれませんが、あえて言わせていただきますと、とても危険な発想なのかなとも思います。教材に関しては私も使っていますし、特別支援の子どもたち用の教材というのは十分に利用可能だしとても有用です。彼らは、特に知的障がいがあるわけではないんですよ。ただ日本語をうまく読んだり、会話は一年ぐらいしたらある程度のものはできますが、時間かかりますよね。家庭環境も整っていない子どもが多くて、そういった支援はなかなか受けられない。つまり普通の家庭で５年かかるのものが、７年、８年、１０年かかる。ということは、なかなかそういった場面でうまく適応できていかない。そういう子どもたちを特別支援に、特別支援にと、同じ支援っていうくくりで考えるのは、ちょっと違うんじゃないのと思います。

４０人の一クラスの子どもを抱えて大変なのはわかります。だけどそれ以上に私は、一クラス２人の先生で複数教員の体制を作ることが先なんじゃないかなと考えたりします。あともう一点質問したいんですが、私たちのグループで一番困っているのが、学校とどういうふうに共有を図るか。こちらは共有したいと思っていても、なかなか向こうさんは組織としても大きいですし、なかなか受け入れてもらえない部分があります。ここでの私たちが持っている情報というのは、学校側に提出したくても門戸を開いてもらえないところがありまして、何か成功例がありましたら、そういう例で、うまく学校と情報共有ができた事例がありましたら教えていただければ助かります。参考になると思います。ありがとうございます。

【 李 】

やっぱり、なかなか難しいですね。ボランティア団体と学校との連携がうまく取れればいいのに。ホントに組織に関わることはすごく難しいですね。キーパーソンというか、そういう人が一人でもいれば変わるんじゃないかと思います。

昨年、私は横浜のフリースクールで、生徒相談を一年間やってきたんですね。フリースクールの講師の中には、学校でコーディネーターをされている方もいますし、そこで学校のつながりや高校の進路指導がうまくいってるんですね。ここがないと、全く学校と関わることができない。これまでに連携のない団体がいきなりやろうとしても難しいし、しかも学校現場は先生の異動がすごく頻繁で安定した人間関係はなかなか築けないですね。ここホントに、こうすべきとかこうすればいいんじゃないかと思いつつ、なかなか実現は難しいと思います。ただ現場の先生からも、ボランティア団体からの支援がほしいとか必要という声が出ていますし、歓迎してくれそうな先生を見つけることがすごく大事かなと思います。

【林田】

ありがとうございました。

■おわりに

お二人の先生には最初に申しましたように、短い時間の中でお願いすることばかりが多かったものですから、もっと時間がたっぷりありましたら、お話がもっと充実したのかもしれません。また、本日ご参加の皆さんも本当に積極的にご意見を出してくださいました。ありがとうございました。この会が何かの結論を導き出せるとは思いませんが、それぞれのお立場で、またそれぞれ活動の場において、何かヒントになるようなものがあったならば、主催者として大変嬉しく思います。まずは飯高先生と李先生に、お礼の意味を込めて拍手をお願いいたします。本日は多くの皆様のご参加、誠にありがとうございました。これをもちまして、本日の多文化共生セミナーを終了いたします。

発　行　　つづきＭＹプラザ(都筑多文化・青少年交流プラザ)
〒224-0003
横浜市都筑区中川中央 1-25-1　ノースポート・モール 5F
TEL：045-914-7171　　FAX：045-914-7172
URL：http://tsuzuki-myplaza.net/
発行日　　平成 25 年 12 月
編　集　　つづきＭＹプラザ（都筑多文化・青少年交流プラザ）